

花 橘

愛しさと切なさで心強さと

発行日

令和5年6月22日

第4号

発行・編集

三崎高校総務課

教務課長 羽田 智紀

一年前の『花橘』で「明日世界が終わるとしたら母の卵焼きと唐揚げが食べたい」と書いた。二月、母の誕生日、手紙を書くのは照れくさいので、『花橘』を封筒に入れて、花束と一緒に渡す計画を立てた。冥土のご飯が自分の作る料理だと息子に言われたら嬉しいと思ったからだ。数ヶ月ぶりの帰宅の日、いつもの卵焼きと唐揚げを楽しみにしながら玄関の扉を勢よく開けた。「ただいまー！」リビングの扉を開けると、ソファに横たわる母の姿があった。大学時代に実家を離れ、これまで何十回と帰省してきたが「おかえりー！」と毎回迎え入れてくれた。しかし今回は違った。しばらくして目を覚ますと、「おお、帰ったんか」と口にした。「今日のご飯なに？」と聞くと、母の返答は「作ってない。なんか食べにいくか？」だった。ショックだった。卵焼きと唐揚げが食べられないことよりも、母の老いが如実に、そしてリアルに痛感したからだ。終わりは突然やってくる。何の前触れもなく。母も辛い状況にあることを頭では理解しているつもりだったが、無性に怒りが込み上げてきた。自分でも身勝手なわがままな一方的な要求だとわかっていながらも、母の作るご飯が食べたくて帰宅していること、いつも元気でいてほしいことを伝えた。見たこともない母の姿に動揺を隠せずにいた。「誕生日おめでとう」という言葉と一緒に花束を渡したが、最後まで『花橘』は渡せなかった。

翌日、母を連れて地元の携帯屋さんに向かった。近々、孫が誕生するので写真や動画を送ってほしいという要望があり、ガラケーからスマホに替えるためだ。タッチパネルに苦戦し、「〇」の操作には絶望を感じた（笑）。母は濁点や句読点などこの世に存在しないかのごとく文章を構成してくる（涙）。「送信」ボタンの位置を覚えられず、なぜか「保存」ボタンを押してしまい、メッセージを送信することができず、また怒ってしまった。気まずさだけが残る帰省だった。

五月にも帰省した。食卓に「卵焼きと唐揚げ」が並んだ。嬉しかった。平静を装い思い切り頬張った。母が精一杯、体調が万全ではない中作ってくれた料理。胸がいっぱいだった。だけど、いつもの味ではなかった。言おうか…、言うまいか……。せつかく作ってくれたのに、傷つけてしまったらどうしよう……。言葉を選びながら、「お母さん、ニンニクがあんまりきいてないよ」母は「バレたか」って笑った。面倒くさくて少し手抜きをしたらしい（笑）。さすが我が母。当たり前なんて存在しない。親が元気でいてくれること。友だちが笑ってくれること。先生が怒ってくれること。自分が健康でいられること。何度送っても全く返ってこない母の「〇」を開いた。僕に送るために作っていた文章が送信できずに保存されていた。作成日は二月末。

そこには「たまこやきとからあげつくってなくてごめん」って書いてあった。来月また実家に帰る。「ありがとう」の言葉に『花橘』を添えて。

愛媛県総合体育大会

6月2日から開催された県総体に、男子バレーボール部、男女卓球部、テニス部が出場し、各会場で、熱戦を繰り広げました。前日には壮行会が行われ、吹奏楽部の演奏と応援団による力強いエールで士気を高めました。3年生にとっては最後の総体でした。選手全員が勝利を目指して全力のプレーをする姿が各会場で見られました。また、声を枯らして仲間を応援するベンチ、スタンドの生徒たちも素晴らしかったです。応援に駆けつけてくださった保護者の皆様、本当にありがとうございました。

